

倦怠と悲しみ

—トマス・アキナスの *acedia* について—

松 根 伸 治

トマスにおける *acedia* という概念を翻訳するのに、しばしば “sloth” や「怠惰」という語があてられるが、この訳語ではその内容のごく一面しか示すことはできない。英語の sloth は「のろのろしている様子、ものぐさ、怠惰」の意味で、木にぶら下がって一日中動かないナマケモノのイメージにつながる。しかし実際には、sloth や怠惰のような言葉でふつう私たちが考える内容とはかなり異なる要素が、この概念には含まれており、その多義性をただひとつの訳語で示すことは難しい¹⁾。トマスが *acedia* という語で考察しようとした複雑な人間のあり方を端的に表すことのできる適切な語を、私たちはもっていないのである。

アケーディアの多面性は、内実の複雑さに加えて、この語がたどってきた歴史のないきさつの反映でもある。そこで論文前半ではまず、歴史的な事情を必要な限りで見ておきたい。このアイディアがキリスト教思想の中で重要な役割を与えられ始めた端緒と、いわゆる「七つの大罪」をめぐる概念史をごく簡単に整理する。後半では、そのような歴史的背景がトマスの議論にどのように生きているかを確認し、さらに、トマスが論じている *acedia* の中核の意味を明らかにすることをめざす。

1 砂漠の倦怠

四世紀の修道士エヴァグリオス・ポンティコス (345頃～399) は、エジプトの砂漠の隠者たちを襲う想念 (*λογισμοί*) を八つあげ、それぞれの特徴や対処法を論じている。そのひとつとして *ἀκηδία* があげられている。このギリ

シャ語の原義は not caring 「気かけない、無関心」だが、ここでは独特の意味をもたされている。以下に当該テキストを要約してみよう²⁾。——アケーディアは最も暑い昼頃修道士たちを襲う「白昼の悪魔」(Ps. 91: 6)である。この想念にとりつかれると、一日を非常に長く退屈に感じ色々なことが気になって、本来の仕事や祈りに落ち着いて専念できなくなる。また、この場所には誰も自分を慰めてくれる人はいないとか、自分にはもっとふさわしい居場所があるのではないかという気持ちがわいてくる。悪魔はこのような邪念を武器にして、禁欲生活のつらさに目を向けさせ、修道生活に対する疑問や疎ましさを抱かせる……。このような記述に沿って考えると、ここでエヴァグリオスの言う *ἀκηδία* とは、退屈、憂鬱、落胆、倦怠、無気力、疎外感などを含んだ、修道士に特有の心の状態である³⁾。

エヴァグリオスの弟子、ヨハネス・カッシアヌス (360 頃～430 頃) は、エジプトでの修道生活の体験を生かして、砂漠の修道戒律や東方の霊性をラテン世界に伝えた教父だが、彼の著作は西洋中世における *acedia* の議論にも決定的な影響を与えた。トマス・アクィナスはカッシアヌスの『師父たちとの問答集 *Collationes*』を定期的を読む習慣があつて、これは生涯続いたと言う⁴⁾。もうひとつの広く読まれた書物『共住修道者たちの規則 *De institutis coenobiorum*』で、彼は次のように言う。

私たちにとって第六の戦いは、ギリシャ人が「アケーディア」と呼ぶものである。それを私たちは「心の億劫さあるいは苦悩」と呼ぶことができる。これは悲しみの親戚で、隠修士たちには多く体験され、砂漠で共住する人々にとっては非常にやっかいな、頻繁に襲ってくる敵である。これは六時課〔＝正午〕頃に最も修道士の心をかき乱す。あらかじめ決まった時間に出るある種の熱のように、いつもの決まった時間に、その衝動の最も熱い火を病んだ魂に押しつける⁵⁾。

二つの点に注目したい。ひとつは、*acedia* はあくまでも修道生活を営む

人々の問題として説明されているということ。もうひとつは、それが間歇性の熱という比喩で語られていることである。エヴァグリオスの「悪魔」にせよ、カッシアヌスの「熱病」にせよ、それは人をいわば外部から襲う敵のイメージで描かれている。

2 悪徳のカatalog

このような *acedia* という現象が、常にその枠組みの中で論じられてきた、いわゆる「七つの大罪」について、次に見ておくことにしよう。罪や悪徳を次々に数えあげる「悪徳表 *Lasterkatalog, catalogue of vices*」は新約聖書、特にパウロ書簡にすでに見られるが、後の時代の七つの大罪の直接の原型になったのは、エヴァグリオス・ポンティコスの記述だと考えられる⁶⁾。しかしすでにふれたように、エヴァグリオスは八つの想念について語っていたのだった。どのようにして八が七になったかといういきさつについて簡単に整理しておく。

エヴァグリオスは、悪しき想念には八つあるとしたうえで、「最初は、次に、第三、第四…」とはっきり順序をつけて次のものをあげる⁷⁾。[1] *γαστριμαργία* 貪食, [2] *πορνεία* 淫蕩, [3] *φιλαργυρία* 強欲あるいは金銭欲, [4] *λύπη* 悲しみ, [5] *ὀργή* 怒り, [6] *ἀκηδία* 倦怠, [7] *κενοδοξία* 虚栄, [8] *ὑπερηφανία* 高慢。

同様にカッシアヌスは、八つの主要な悪徳 (*principalia vitia*) として以下を列挙している⁸⁾。[1] *gastrimargia*=*gulae concupiscentia, ventris ingluvies*, [2] *fornicatio*, [3] *filargyria*=*avaritia, amor pecuniae*, [4] *ira*, [5] *tristitia*, [6] *acedia*=*anxietas sive taedium cordis*, [7] *cenodoxia*=*vana seu inanis gloria*, [8] *superbia*。——名称も順序もエヴァグリオスを踏襲していることがわかる(四番目と五番目が入れ換わっている以外はまったく同じである)。ギリシャ語の *ἀκηδία* はそのまま音写されてラテン語 *acedia* になった。

このようなりストをカッシアヌスが書き記したのはおよそ420年から30年頃だったと考えられる⁹⁾。それから約150年がたつて、もう一人西方の *acedia*

概念の歴史に欠かせない人物が現れる。ローマ教皇グレゴリウス一世（540 頃～604）である。大グレゴリウスの悪徳表はこうである。

すべての悪の根は高慢である。それについて聖書の証言では、「すべての罪のはじめは高慢である」（Eccli. 10: 15）と言われている。そしてこの有毒な根から、その最初の子供たちが七つの主要な悪徳として生み出される。すなわち、虚栄、嫉妬、怒り、悲嘆、強欲、腹の貪食、淫蕩がそれである¹⁰⁾。

リストを確認すると、[1] *inanis gloria*, [2] *invidia*, [3] *ira*, [4] *tristitia*, [5] *avaritia*, [6] *ventris ingluvies*, [7] *luxuria* である。これをカッシアヌスと比べたときに目につく違いは、まず八つが七つに減ったことである。カッシアヌスが最後にあげていた *superbia*（高慢）をグレゴリウスは「すべての悪の根」として、いわば別格扱いし一覧から外した。そして、*invidia*（嫉妬）が加えられ、*acedia* がなくなったことで、結果的に項目の数は七つになった。並べる順序で目立つのは、貪食、淫蕩の二つがリストの最初から最後へ来たことである。グレゴリウスの順序には、精神的なもののほど前へ、身体的・物質的な悪徳は後ろへという特徴が観察できる。

acedia がリストから除かれた理由を考えてみよう。エヴァグリオスとカッシアヌスの *acedia* には、砂漠の真昼の暑さという気候条件と、孤独にひとり祈る隠修士の生活もたらす独特の気分がただよっていた。おそらくグレゴリウスはこれをそのままラテン世界へ持ち込むことを躊躇したのだと思われる¹¹⁾。あるいは、類似した特徴をもつ *tristitia* と *acedia* の二つを、ラテン語としてより一般的な *tristitia* という呼び名に一本化し整理したと言えるかもしれない。

トマス・アクィナスは、カッシアヌスと大グレゴリウスに加えて、イシドルス、ダマスケヌスなど、様々な伝統的典拠を整理しながら、*acedia* について体系的に考察している¹²⁾。カッシアヌスやグレゴリウスが使っていた “prin-

capalia vitia”という呼び名は、トマスでは“vitia capitalia”と言われている¹³⁾。capitaleは「^{かしら}頭となって他のものを導く」「他の悪徳がそこから生じてくる」「罪や悪徳にきっかけや動機づけを与える」という意味あい使われているので、他の罪の源という意味で「根源的悪徳」「罪源」などの訳語がトマスの用語法の内実にはなっていると思われる。

さて、トマスは罪源を列挙するときには明らかに、上で見たグレゴリウスの用語と順序に従っている。しかしよく読むと、異論や導入部ではこのようなリストを掲げていながら、実際に本文では tristitia ではなく acedia という語でことがらが論じられている点には注目すべきである¹⁴⁾。トマスはグレゴリウスの悪徳表は尊重しながらも、自分自身は、罪源のひとつを示す用語として tristitia ではなく acedia を最終的には優先させている。『悪について』第9問から15問で七つの罪源を順にとりあげて論じる場面で、問題のタイトルに tristitia ではなく acedia が採用されている事実もこれを裏づける。グレゴリウスがいったんリストから削除した acedia をトマスは復活させたわけである。『悪について』での用語と順序を、トマス自身が最も好むものだと考えることができるとしたら、トマスの罪源のリストは以下のようなになる¹⁵⁾。[1] inanis gloria 虚栄, [2] invidia 嫉妬, [3] acedia 倦怠, [4] ira 怒り, [5] avaritia 強欲, [6] gula 貪食, [7] luxuria 淫蕩。——グレゴリウスとの違いは、tristitia の代わりに acedia がエントリーし、その順序もひとつ上がっていることである。

以上、七つ（あるいは八つ）の罪源の一覧の変化を、エヴァグリオス、カッシアヌス、グレゴリウス、トマスの四人に即して早足で見えてきたが、本来、より厳密で豊かな概念史を描くためには、4世紀から13世紀の他の様々な思想家たちについて比較・考察する必要がある。だがここではこれ以上細かな歴史的考証には立ち入らないことにしたい。この主題をめぐるいくらかの紆余曲折があったことと、トマスのリストには acedia が含まれていると言えることを確認しておくことで今は満足し、次に、トマスの議論の内容に焦点を絞るこ

とにしよう¹⁶⁾。

3 トマスの議論：acediaの多面性

トマスが論じている acedia の特徴は、三つの側面に分けて考えることができる。ただしこの区分は、概念の内実をよりよく理解するために便宜上私が立てたものであり、トマス自身がこのような分類をしているわけではない。

[1] 身体的労苦の忌避・怠惰

トマスによれば、「倦怠とは、身体的労苦のゆえに人に霊的な活動を怠るようさせる、一種の悲しみである。」¹⁷⁾「倦怠には、人が労苦のゆえに霊的善を得ることを拒絶するという怠慢が属する。」¹⁸⁾

ある精神的な善を獲得する過程に身体的な労苦がともなうことがあるが、そういう負担を避けようとして、本来目標とするべき善への否定的な感情が生まれる。さらに、そういう善をなかば意識的に怠る場合もあるだろう。この意味で acedia は「怠惰、怠け」と見なされ、苦労をいとわず働く「勤勉」に反する悪徳という要素が強い。冒頭で述べたように、私たちがふつう「怠惰」や“sloth”という訳語ですぐに連想するのはこのような特質である。仏教用語を借りて「懈怠^{けだい}」と訳してみても、これは精進の反意語であろうから、事情はあまり変わらない。

中世以降の倫理思想にも acedia という名称は残ったし、それを大きな悪徳ととらえる流れは近世以後も続いている。そしてそういう思想を反映した文学作品や絵画でも、この悪徳を具象化することは頻繁におこなわれてきた¹⁹⁾。だがそのような表現の多くは、「勤勉」や「労働」の反意語としての「怠惰」という側面にかたよったものであるように見える。たとえばヒエロニムス・ボスの描く、手を懐へ入れまどろむ人物を、私たちは普通、退屈そうにしている怠け者だと受け取るだろう。しかし、すぐに述べるように、これは acedia のごく限られた一面にすぎないのであって、このような観点だけを中心にした見方は、現象の外表面あるいは表層だけをとらえた矮小化である。

〔2〕 鬱・無気力・麻痺

上の「怠惰」とは一線を画すと思われる、acediaの第二の側面がある。「倦怠は〔……〕何もおこなう気がしなくなるほど人間の精神を意気消沈させる。〔……〕倦怠とは行動することへのある種の億劫さを意味する。」²⁰⁾「倦怠は霊を落ち込ませるある種の悲しみである。」²¹⁾「倦怠とは善いことを始めるのを怠る精神の麻痺である。」²²⁾

トマスは、ダマスケヌスの「重くのしかかる悲しみ tristitia aggravans」²³⁾というacediaの規定から、ある種の気鬱を表す特徴を引き出してくる。さらにそれが重症になると体を動かさないほどになると言われている²⁴⁾。倦怠にとらわれた人の様子が一種の病的な状態として説明されており、カッシアヌスの言う「熱病」を連想させる。acediaのもつこのような側面は、現代ならおそらく、様々な名称のもとに分類される「心の病」として析出されることになるのではないかと思う。この側面を誇張すれば、倦怠は道德の問題というよりむしろ医療の守備範囲だということになるかもしれない。したがって、すでに述べたのと似た事態がここでも生じていると言ってよい。すなわち、もともとトマスや中世の神学者たちがacediaという語で呼び、考察しようとした人間のあり方の一部分だけを、病気というかたちで抽出あるいはデフォルメする見方に私たちは慣れてしまっている。

「怠けているのではなくて心の病気なのだ」という言い方も、「病気ではなくて怠けているだけだ」という言い方も、どちらもしばしば耳にする。しかし、そのような明確な境界線が引けないような心（と体）の状態をむしろ考察の対象にするような問題意識が、倦怠を悪徳あるいは罪として論じる場面にはあったのではないか。トマスの考察では、先に見た怠惰の要素と、今の気鬱の側面とは分かちがたく結びついている。それが一方では、労働や勤勉に反する「怠け」として、他方は「病気」として強調されることによって、acediaの特徴それぞれの結びつきが見失われ、その多面性が平板化されてしまった、という歴史的経緯があると考えられる。そしてさらに重要なのは、上で述べた二つの側面はacediaの目につきやすい特徴であることはたしかだが、実は次に見る

ように、トマスにとって本質的な説明ではないということである。

[3] 神的善に対する悲しみ

そもそも第一の特徴として取り出した倦怠の特徴は、この悪徳に特有のものとは言えない。実際トマスは次のように言っている。

骨が折れるとか身体に不快だとか、自分の快を妨げるとかそういう理由で靈的善を避けるという側面からは、倦怠を特定の種の悪徳だと言うことはできない。なぜなら、こういう点では倦怠を他の肉的な悪徳から区別できないからである。人は肉の悪徳によって身体の休息と快楽をそもそも求めるものである²⁵⁾。

そして第二にあげた無気力や気鬱は、悪徳そのものというよりも、そこから結果的に生じてくる心理状態あるいは身体的状態として位置づけることができる。それでは、何が倦怠という悪徳の輪郭を明確にするかと言えば、トマスによるとそれは「神の善」から自分を退けるということである。「倦怠は任意の靈的善から精神が退くことではなく、精神が本来は必然的に固着すべき神的善から退くことである。」²⁶⁾「愛徳が喜ぶ神的善を悲しむことは特定の種の悪徳に属し、これが倦怠と呼ばれる。」²⁷⁾

ここで倦怠は、対神徳であるカリタスに反する悪徳という、トマスの理論の中では核心の意義を与えられる。しかしこの点が、トマスの *acedia* 概念を理解するとき、しばしば見過ごされているのである²⁸⁾。トマスによれば、倦怠による過度の気鬱のせいで、靈的な善や至福を自分には到達可能なものとはもはや見なせなくなったときに、「絶望 *desperatio*」が生じる²⁹⁾。倦怠と絶望のこのようなつながりを考えると、倦怠が「罪源」のひとつに数えられていること、すなわち、倦怠という悪徳が他の様々な危険な悪徳を生み出す源になるとされていることに納得がいく³⁰⁾。——この点を少し違う観点から考えてみよう。あらゆる罪には個別的な選択に関する何らかの無知や誤りがともなっていると

いうのがトマスの見解だが、それはかならず意志的な（したがって最終的には当人が責任を負うべき）怠りと結びついている³¹⁾。さらにそのような怠りがなぜ生じるのかをたどっていけば、そこには精神的な善に対するある種の無関心ないし冷淡さが見出されると思われる³²⁾。このような、精神的価値の否定こそ、倦怠を罪源として考えるときに最も重要な側面である。

さらに、次のテキストにはトマスの倦怠のとらえ方がよく表れている。

倦怠は安息日を聖とする規定に反している。この規定では、それが道德上の規定である限りにおいて、神において精神が憩うことが命じられているのだが、神的善に対する精神の悲しみはこれに反しているからである³³⁾。

トマスはダマスケヌスにならって、*acedia* を「悲しみの種 *species tristitiae*」のひとつに位置づける³⁴⁾。倦怠が「悲しみ」と規定されるのは、それが愛の「喜び」に対立しているからである。すなわち倦怠とは、自分を越えた善を享受し心から喜ぶことができない状態、喜びのうちに心が解放され憩うことのできない状態である。「怠惰、怠け」といった側面、あるいは「無気力、麻痺」のような特質では、上のテキストの真意は十分には理解できない。ヨゼフ・ピーパーはこの点を指摘して、次のように言っている。「中世の人生観で言われる「怠惰」*acedia* に対立する概念は、せつせと日々の生業にいそしむ「労働精神」ではありません。むしろ、人間が元気良く自己の本質、世界全体、そして神を肯定し、それらと一致すること、つまり「愛」が「怠惰」の対立概念です。」³⁵⁾

以上のような *acedia* の説明は、エヴァグリオスやカッシアヌスとは力点が違っており、トマスに特徴的なものと言える。このような考え方に沿って、倦怠の本質を「精神的な善に対する無関心」「精神的価値の否定」——これらは字句通りにはトマス自身の表現ではないが——と考えることができるなら、それは砂漠の修道士たちだけを襲う特殊な煩惱ではなく、私たちが彼らと共有しているきわめてアクチュアルな問題だということになるだろう。日常的な

言葉ではこれを「やるせなさ」「むなしさ」と表現できるかもしれないが、繰り返せば、それは単なる怠け癖といったものとも違うし、鬱屈した一時的な気分とも違う。そのような現象的側面をたしかに倦怠はそなえてはいるが、それら諸要素の淵源にあり、この悪徳の多面的あり方の中心に存するのは、人間のもっと内奥に巣くう空虚とでも言うべき、純粋な喜びに反発する「悲しみ」である。この意味で倦怠は深刻な悪徳なのである³⁶⁾。

結

七つの大罪のリストを見直して、トマスの議論の歴史的な位置づけを確認しておこう。大グレゴリウスが主要な悪徳の一覧から一度は除いた *acedia* を、トマスが罪源の呼び名として再び採用したことによって、これを最初に詳しく考察した東方修道制の伝統の記憶が、ラテン世界でもとぎれずに存続することになった。そしてその核心に、神的善に対する悲しみという意味あいを与えられることで、*tristitia* というグレゴリオスの用語法も面目を保つ結果になったと言える。もともとエヴァグリオスとカッシアヌスでは別々の項目としてあげられていた「倦怠 *ἀκηδία*, *acedia*」と「悲しみ *λύπη*, *tristitia*」は、以上のように、トマスでは密接に結びついたものとして論じられ、両方が生かされている³⁷⁾。

このように、トマスの倦怠の説明は様々な歴史的源泉を含んでいるが、それらの単なる折衷ではなく、独自の内容と意義をそなえている。とりわけ、第三の側面として論じた「神的善に対する悲しみ、愛の喜びとの対立」という要素がトマスの考察の中核にあることはもう一度強調しておく価値があるだろう。まずトマスの議論の特徴としてこの点を見落としてはならないし、さらには、私たち自身のアケーディアを考えるうえでもそのような視点は示唆的である³⁸⁾。——ただし、本稿ではあえて三つの側面への分節化を試みたが、トマスの説明では、第三の視点を中心にしながらも、前二者の要素（怠惰と気鬱）が緊密に結びついた、多様な欠落を含んだ人間の状態が *acedia* という一語に込められて論じられていることをあらためて確認しておきたい。したがって、やはり最

後まで、この語を端的に表現する適訳はなく、表題に掲げた「倦怠と悲しみ」は苦肉の策である。

*この論文は第54回中世哲学会（2005/10/29、於ノートルダム清心女子大学）での研究発表にもとづいています。発表と論文執筆にあたって貴重な教示や忠告を賜った多くの方々に感謝申し上げます。

注

[テキスト略号] *Practicus* = Évagre le Pontique, *Traité pratique ou le moine*. t. II, traduction, commentaire et tables par A. Guillaumont et C. Guillaumont (Sources Chrétiennes 171), Cerf, Paris, 1971. *De institutis* = Johannes Cassianus, *De institutis coenobiorum; De incarnatione contra Nestrium*. ed. M. Petschenig (CSEL 17), Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 2004. *Collationes* = Johannes Cassianus, *Collationes*. ed. M. Petschenig (CSEL 13) 2004. *Moralia* = Gregorius Magnus, *Moralia in Job libri XXIII-XXXV*. ed. M. Adriaen (CCSL 143B), Brepols, Turnhout, 1985.

- 1) 日本語の翻訳者たちも様々な言葉を使って苦労されている様子がかがわれる。試みに創文社の『神学大全』日本語訳から *acedia* の訳語を拾ってみると、「ものぐさ、怠惰、(靈的)怠惰、不快さ、塞ぎ、頹廃、^{ようらん}慵懶」などが見つかる。
- 2) *Practicus*, c. 12 を要約。以下の翻訳も参照した。エウアグリオス・ポンティコス「修行論」佐藤研訳。上智大学中世思想研究所+大森正樹編訳・監修『中世思想原典集成3・後期ギリシア教父・ビザンティン思想』(平凡社, 1994年)所収, 40~41頁。
Evagrius of Pontus: the Greek ascetic corpus. tr. by R. E. Sinkewicz, Oxford UP, 2003, p. 99.
- 3) cf. R. Sorabji, "From first movements to the seven cardinal sins: Evagrius." in: *Emotion and peace of mind: from Stoic agitation to Christian temptation*. The Gifford Lectures, Oxford UP, 2000, pp. 357-371; 大森正樹「祈りの系譜(二)ヘシカズム研究: アケーディアとエヴァグリオスの祈り」『エイコーン』第13号(1995年)16~27頁。なお、エヴァグリオスに関する研究論文の所在などを以下に学んだ。鈴木順「エヴァグリオス・ポンティコスにおける知恵と知識^{ソフィア グノーシス}」『新プラトン主義研究』第4号(2004年)121~138頁。
- 4) J.-P. Torrell, *Saint Thomas Aquinas, vol. 1: the person and his work*. tr. Robert Royal, CUAP, 1996, p. 15. 実際たとえば『神学大全』第II部-IIにはカッシアヌスから

の引用 (*De institutis, Collationes*) がしばしば見出される。

- 5) *De institutis*, 10, 1. pp. 173-74. Sextum nobis certamen est, quod Graeci ἀκηδίαν vocant, quam nos taedium sive anxietatem cordis possumus nuncupare. Adfinis haec tristitia ac solitariis magis experta et in heremo commorantibus infestior hostis ac frequens, maxime circa horam sextam monachum inquietans, ut quaedam febris ingruens tempore praestituto ardentissimos aetus accessionum suarum solitis ac statutis horis animae inferens aegrotanti.
- 6) cf. ルイ・ブイエ, 上智大学中世思想研究所訳・監修『キリスト教神秘思想史1・教父と東方の靈性』平凡社, 1996年, 344頁。
- 7) *Practicus*, c. 6. p. 520.
- 8) *De institutis*, 5, 1. p. 81; *Collationes*, 5, 2. p. 121.
- 9) cf. M. Bloomfield, *The seven deadly sins: an introduction to the history of a religious concept*. Michigan State UP, East Lansing, 1967, p. 69; S. Wenzel, *The sin of sloth: acedia in medieval thought and literature*. University of North Carolina Press, Chapel Hill, 1967, p. 19.
- 10) *Moralia*, 31, 45. p. 1610. Radix quippe cuncti mali superbia est, de qua, scriptura attestante, dicitur: Initium omnis peccati superbia. Primae autem eius soboles, septem nimirum principalia vitia, de hac virulenta radice proferuntur, scilicet inanis gloria, invidia, ira, tristitia, avaritia, ventris ingluvies, luxuria.
- 11) Wenzel, op. cit., pp. 24-28.
- 12) acedia を特に主題としてとりあげ, 詳しく論じているのは次の二箇所である。ST II-II, q. 35; *De malo*, q. 11.
- 13) I-II, q. 84, aa. 3-4; *De malo*, q. 8, a. 1.
- 14) *De malo*, q. 8, a. 1, arg. 1. Dicit enim Gregorius XXXI *Moralium* “Septem sunt principalia vitia, scilicet inanis gloria, invidia, ira, tristitia, avaritia, ventris ingluvies, luxuria”. I-II, q. 84, a. 4, introd. [...] septem esse vitia capitalia, quae sunt inanis gloria, invidia, ira, tristitia, avaritia, gula, luxuria. — 二箇所それぞれの主文も参照。
- 15) 『神学大全』第II部-IIでは対神徳と枢要徳がその構成の骨格になっているので、『悪について』のように七つの罪源がまとめて詳論される箇所はない。『神学大全』では, acedia (II-II, q. 35), invidia (q. 36), avaritia (q. 118), inanis gloria (q. 132), gula (q. 148), luxuria (qq. 153-54), ira (q. 158) というように, 罪源はそれぞれの徳に反するものとして議論されているから, 一見ばらばらに分散している。
- 16) 管見の限りトマスの acedia に関する本格的な研究書は見当たらないようだが, ボナヴェントゥラについては以下のモノグラフがある。R. Jehl, *Melancholie und Acedia: ein Beitrag zu Anthropologie und Ethik Bonaventuras*. Paderborn, Schö-

ningh, 1984.

- 17) I, q. 63, a. 2, ad 2. *acedia* vero est quaedam tristitia, qua homo redditur tardus ad spirituales actus propter corporalem laborem.
- 18) I-II, q. 84, a. 4, ad 5. *acedia*, ad quam pertinet negligentia qua aliquis recusat bona spiritualia acquirere propter laborem.
- 19) 以下にこのような図像が多く掲載されている。A. Larue, *L'autre mélancolie: acedia, ou les chambres de l'esprit*. Hermann, Paris, 2001. また、文学作品については、Bloomfield, op. cit., p. 105ff; Wenzel, op. cit., p. 68ff. を参照。
- 20) II-II, q. 35, a. 1, c. *acedia* [...] deprimit animum hominis ut nihil ei agere libeat. [...] *acedia* importat quoddam taedium operandi.
- 21) II-II, q. 20, a. 4, c. *acedia* est tristitia quaedam deiectiva spiritus.
- 22) II-II, q. 35, a. 1, c. *acedia* est torpor mentis bona negligentis inchoare.
- 23) *De fide orthodoxa*, 2, 14. Tristitiae vero species sunt quatuor: accidia, achos, invidia, misericordia. Accidia igitur est tristitia aggravans, achos vero est tristitia vocem auferens, invidia vero est tristitia in alienis bonis, misericordia vero tristitia in alienis malis. 「悲しみの種は四つあり、倦怠、苦悩、妬み、憐れみである。倦怠とは重くのしかかる悲しみ、苦悩とは声を奪い去る悲しみであり、妬みは他者の善への悲しみ、憐れみは他者の悪への悲しみである。」——テキストは次による。なお、ミーニュとは違いこの版では章立てが通し番号で、引用箇所は第28章にあたる。Saint John Damascene, *De fide orthodoxa*. Versions of Burgundio and Cerbanus. ed. E. M. Buytaert, Franciscan Institute Publications, St. Bonaventure, N. Y., 1955, p. 121.
- 24) I-II, q. 35, a. 8, c. Si vero intantum procedat talis aggravatio, ut etiam exteriora membra immobilitet ab opere, quod pertinet ad *acediam*.
- 25) II-II, q. 35, a. 2, c. non potest dici quod sit speciale vitium *acedia* in quantum refugit spirituale bonum prout est laboriosum vel molestum corpori, aut delectationis eius impeditivum: quia hoc etiam non separaret *acediam* a vitiis carnalibus, quibus aliquis quietem et delectationem corporis quaerit.
- 26) II-II, q. 35, a. 3, ad 2. *acedia* non est recessus mentalis a quocumque spirituali bono, sed a bono divino, cui oportet mentem inhaerere ex necessitate.
- 27) II-II, q. 35, a. 2, c. tristari de bono divino, de quo caritas gaudet, pertinet ad speciale vitium, quod *acedia* vocatur.
- 28) 次の論文はトマスの *acedia* が神学的悪徳、精神的悪徳であることを強調している。R. K. DeYoung, “Resistance to the demands of love: Aquinas on the vice of *acedia*.” *The Thomist* 68 (2004) 173-204. ただし、トマスの思考の豊かさをすべて、神的善に対する悲しみという側面に集約的に還元することに意義があるとは私は思わない。本文で述べるように、それを中心としたこの概念の多面性をこそじっくり味わうべきだろう。

- 29) II-II, q. 20, a. 4.— cf. G. アガンベン『スタンツェ：西洋文化における言葉とイメージ』岡田温司訳，ありな書房，1998年，23～24頁。「このような「神聖なる善からの後退り」[recessus a bono divino]の感覚，つまり精神の豊かな可能性を前にした人間のこうした逃走の感覚は，そこに根本的な両義性を内包している。心理に関する中世の学問がもたらした成果のもっとも驚くべきものが，この両義性の究明である。怠惰な者が神聖なる目的から身を引くということ，それは実際，彼がこの神聖なる目的を忘れていられるとか，望まないでいられるとかいうことを意味するのではない。[……] 聖トマスは，絶望とその固有の欲望との両義的な関係を完全に理解していた。彼は言う。「われわれが切望しないものは，われわれの希望の対象でも，われわれの絶望の対象でもありえない」と。『神学大全』において怠惰が，「憂慮」[sollicitudo]つまり願望や気遣いではなく，「悦び」[gaudium]つまり神のもとでの魂の満足に対比されるとすれば，それは，怠惰の両義的でエロティックな星座によるのである。」
- 30) II-II, q. 35, a. 4, c.
- 31) I-II, q. 6, a. 8, ad 2; q. 76, a. 4, ad 1; *In Sent.* II, d. 39, q. 1, a. 1, ad 4.
- 32) cf. I-II, q. 84, a. 4, ad 5.
- 33) II-II, q. 35, a. 3, ad 1. *acedia contrariatur praecepto de sanctificatione sabbati*, in quo, secundum quod est praeceptum morale, praecipitur quies mentis in Deo, cui contrariatur tristitia mentis de bono divino. cf. I-II, q. 105, a. 5, ad 2.
- 34) I-II, q. 35, a. 8. ダマスケヌスのテキストは注 23 を参照。
- 35) J. ピーパー『余暇と祝祭』稲垣良典訳，講談社学術文庫，1988年，64頁。
- 36) 本稿では「悲しみ」のもっぱら否定的な側面を述べたが，その積極的意義をさぐる視点がトマスに見出せるかどうかは，さらに考えるべき論点である。パウロの言う「神に沿った悲しみ」「この世の悲しみ」の解釈などが議論の入り口になるのではないだろうか。
- 37) 東方のスピリチュアリティとトマスの関係，また，東西修道制の比較という大きな主題については，本稿で何か生産的なことを主張することはできなかった。だが *acedia* に関する哲学史的研究は，この重要なテーマに取り組むひとつの端緒になるに違いない。
- 38) *acedia* に関するより広い視点からの考察のために，以下の文献がいくつかの興味深い論点を提示してくれる。丹生谷貴志「Accidia あるいはアパシー」『ユリイカ』2004年5月号，青土社，84～94頁。L. スヴェンセン『退屈の小さな哲学』鳥取絹子訳，集英社新書，2005年。M. L. Raposa, *Boredom and the religious imagination*. UP of Virginia, Charlottesville and London, 1999.